

歴史探訪

クラブ! 其の122

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

貯金で村を救おうとした人々

亀山町の墓地を調査中に、不思議な石碑を見つけました。この石碑は昭和7年に建てられたもので、石碑の上部の枠には「五萬円貯金」と大きく刻まれています。裏面には、この碑を建てた5人の名前が記されており、貯金の決意を記念して建てられたものようです。石碑が建てられた目的として「貯金」とは、初めて見ました。



▲「五萬円貯金」と刻まれた碑

くこと（勤儉）、生産力にに応じた消費、富の還元」という教えです。渥美半島では、明治26年、尊徳の教えを普及する三遠農

ら、そのお金は代々の財産とし、子孫は毎年その利子を受ける」と結んでいます。さて、どんな思いでこの碑を建てたのでしょうか。

明治から戦前にかけて渥美半島の農民の暮らしは貧しく、自給自足が原則でした。農家が収入を得られるようになったのは、養蚕業が盛んになつてからです。それでも楽にならず、賭け事や飲酒など村の生活は乱れることもあつたようです。しかし、その頼りの養蚕さえも、昭和初期に起こった世界恐慌のため海外での絹の需要が減り、農村は打撃を受けました。

このような農村の危機を救つたのは、二宮尊徳の「節約しながら勤



▲貯金記念碑(亀山町五斗山)

学社東三支社が野田村に設立されるなど、熱心に農村の改善に取り組み、各村の再建に役立ちました。

その具体的な改善策の一つが、生活を正し、節約したお金を貯金するということでした。もともと日本人には貯金の習慣がなかったため、これは画期的なことでした。そして、尊徳の勤儉の教えや、明治時代終わりから政府が奨励した勤儉貯蓄が定着し、一般にも貯蓄思想が普及し、各村に貯蓄団体ができました。その教えは学校にも定着し、戦後も続いていきます。

この碑を見て思い出したのが、当時の郷土史研究家の藤井敏郎(和地町)がNHK豊橋放送局で紹介した古川吉次郎(小塩津町)の話です。吉次郎は、決して豊かではなかった小塩津村を改革するために、三遠農学社を通じ、農業の勉強会を開いて

いました。吉次郎は、特に勤儉の教えを大切と考え、大正8年、節約したお金を貯め、将来に活かそうと「家庭五万円百年計画同盟会」を結成し村で貯金を広めました。当時、年18円ずつの貯金でしたが、なかなか思うようにはいきません。しかし、現在の自分たちの生活だけでなく、百年先の自分たちの子孫のことを考え、財産を蓄えようとしたのです。この純粹な心意気が胸を打ちます。

この時代は、貯金を通じて村の改革がなされようとしていました。そのひとつの表れがこの石碑です。しかし庶民が身を削りながら進めた貯金も、その一方で戦争資金の調達に利用されていたのも事実です。(増山)

今月の「表紙」

▼緑がまぶしい季節。市内各所で咲くさまじまな浮かべる花はサツキです。旧暦の五月(皐月)の頃に一斉に咲くことから名前が付いたのだとか。サツキの花言葉には「節制」があります。電力不足が心配される昨今。日々の暮らしの中で忘れずに取り入れていきたいですね(O)

【表紙の写真】神宮神御衣御料所のサツキ(亀山町)